

故郷は遠きにありて？

私たちにとって「今を生きる場所」とは、そこに大切な人がいたり、素晴らしい自然や資源に恵まれ、将来にわたって安心して生活できる、あたたかな心の居場所となるべきふるさとです。

子どもたちにとっては、さらに深い意味を持ちます。自分は何を大切にし、どのように生きていくのかを模索し、より良く生きるための基盤となり、自己認識（アイデンティティ）を育む場所となるからです。このアイデンティティの確立によって、大人になってどこで生きようとも、思いを馳せるふるさとがあることは、生きるための支えとなるだけでなく、夢や希望を持って行動する原動力ともなります。

そのため、ふるさとについて学び、その魅力を知ることは、子どもたちがふるさとへの愛着や誇りを持つきっかけとなり、仲間と共に今を生きる場所をさらにより良くしていこうとする“郷育”の重要性を、改めて認識しなくてはならないと感じています。

一方、現在の社会状況を見ると、少子高齢化や人口減少、それに伴う地域活力の低下などが懸念され、変化が激しく予測が困難な時代となっています。大江町でも社会の縮図のような地域課題が山積しており、その一つの対応として令和10年度に小学校の統合、令和15年度には9年間の義務教育学校創設へと舵を切りました。

急速な情報技術の革新により世界はより身近になり、地域にいても世界と日常的につながっている時代になってきています。しかし、この進展に人々の精神が追い付いていないと感じるのは、私だけではないと思います。

このような時代だからこそ、ふるさとについて学ぶ意義は、子どもたちの生きていく支えとなり、夢や志を持って行動する原動力となるだけでなく、ふるさとの課題解決が世界に先駆けた先進事例となる可能性もあります。世界がより身近になる中で、ふるさとの課題解決は、グローバルな課題解決への大きな端緒ともなり得るのです。

「故郷は遠きにありて思ふもの」という有名な詩の一節がありますが、悲しく嘆くばかりでなく「故郷は今を生きる場所としてより良くしていくべきもの」と認識していきたいものです。

令和8年3月

大江町教育委員会
教育長 清野 均